

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年 5月23日現在

機関番号：12061

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21520181

研究課題名（和文） 中世和歌東西交流史の研究

研究課題名（英文） Research of the history of east-and-west exchange in medieval Waka

研究代表者

渡部 泰明（WATANABE YASUAKI）

東京大学・大学院人文社会系研究科・教授

研究者番号：60191813

研究成果の概要（和文）：中世和歌を東西の交流という視点から分析することにより、新しい和歌史を提唱する成果を三つまとめ、藤原定家・藤原俊成という中世和歌の中心歌人の和歌的方法の本質を明らかにする論文、および東西交流の要に位置する西行についての論文を発表し、『新古今和歌集』の注釈の共同研究を進めた。

研究成果の概要（英文）：By analyzing Waka of the middle ages from a viewpoint called east-west interchange, I settled three result to propose history of Waka, and I announced the articles to clarify essence of Fujiwara-no-shunzei and Fujiwara-no-teika, who are two most important Waka poets, and Saigyō, who is located in the pivot of East-West interchange, and I pushed forward the collaborative investigation of the explanatory note of 'Sinkokin-wakashū'.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	700,000	210,000	910,000
2010年度	500,000	150,000	650,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	1,700,000	510,000	2,210,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・日本文学

キーワード：和歌史・藤原定家・藤原俊成・新古今和歌集

1. 研究開始当初の背景

和歌の研究は戦後急速に精密化したがる、それが歌人別・歌集別に細分化する弊害も呼んだ。実証的な研究水準を保持しつつ、和歌史的な視野から、中世和歌を総合的に把握することが求められていた。

2. 研究の目的

源実朝を中心とする東国和歌と、藤原俊成・藤原定家を中心とする宮廷和歌とを総合的に分析し、『新古今和歌集』の性格を解明する。

3. 研究の方法

文献学的・注釈学的研究を深めつつ、それらを基盤として中世和歌を和歌史的に位置

づける。

4. 研究成果

中世和歌を東西の交流という視点から分析を試みた。その際、最も重要な核心となるものは何か、とえば、表面的な言葉の新しさ以外に、どうやって和歌の意義を把握するか、ということである。これまでの、とくに近年の和歌史研究は、大きく言えば、①和歌の作者である歌人の現実的・歴史的なあり方と、②和歌の表現の新しさを、索引やデータベースを駆使して指摘する表現研究に大別されていた。①は伝記研究と、複数の歌人たちのそれを群として捉える歌壇史研究に下位分類されるが、歌人を圍繞する文学的環境を考察するという点では共通する。この分野において和歌史を記述しようとする、結局和歌に関わる政治史を描くことになる。和歌の内容的な問題に触れることがないからである。また、後者は、例えば『新古今和歌集』や京極派和歌などのような個性的な作品や歌人たちの分析には一定の効力をもつが、中世の時代の圧倒的多数を占める、平淡な、一見無個性的な和歌の分析には、適用しがたいという側面をもっていた。この観点から描かれた和歌史は、個性的な歌人やその時代を孤立的に描くことになり、連続する歴史として描きがたい、ということになってしまうのである。しかも、個性的な表現は、本質として虚構性をもつ言語の可能性を生かそうとするものであり、その必然として現実を超脱する傾向を持つ。したがって、②の研究との乖離は大きくなる一方である、という問題も発生した。①・②の間には、容易に埋めがたい溝が存在しているのが現状である。

そこで、①・②を総合する視点が求められることになった。その視点を可能とする方法として、和歌を言語表現としての作品と見るだけでなく、行為として捉えるという方法を用いることを提案するに至った。①の伝記研

究・歌壇史研究は、さまざまな和歌にまつわる行為が、それぞれに特有の儀礼的な場で行われていることを明らかにした。つまり和歌にまつわる行為とは、日常的な行為とは一線を画す、儀礼的な行為であったことを示したのである。また、②の研究で分析しがたかった、非個性的な和歌も、出来不出来はともかく、何らかの和歌を詠んでその儀礼的な場に参画することを第一義としていたことを表している。和歌が成立した儀礼的な場での行為に支えられて、それぞれの表現の意義が読み解かれなければならないのである。この点を主唱したことが、申請者の研究の独創性を形成している。

以上の視点と方法により、本研究期間に申請者が成した研究成果は、以下の4点にまとめられる。1) 演技という観点から和歌の本質を捉えた総論を単著として刊行し、勅撰和歌集の歴史を記述するなど、新しい和歌史を提唱する成果を三つまとめ、2) 藤原定家の本歌取りの方法や、藤原俊成の歌論における伝承性を文体において把握する和歌的方法の本質を明らかにする論文を発表し、3) 東西交流の要に位置する西行について、鳥羽離宮のもつ文学的意義を考察する学会発表を行いかつ論文を発表し、4) 若手研究者6名とともに、『新古今和歌集』の注釈の共同研究を進めた。以下、それぞれについて具体的に述べる。

1) 『和歌とは何か』(2009)は、和歌が儀礼的な場における演技であるとする申請者の視点・方法を提唱した著書である。前半第I部は枕詞・序詞・掛詞・縁語・本歌取りの和歌的修辞を、儀礼的な場における演技的表現とすることで、統一的に捉える新視点を提示した。後半第II部は、贈答歌・歌合・屏風歌・古今伝授などを、和歌特有の場のもとにどのような和歌的な、すなわち演技的な行為

がなされたか、そしてどのような表現が獲得されたかを説いている。現実的な場と虚構的な表現とを、演技という視点によって架橋する試みである。本研究課題との関連で言えば、源実朝の代表作「箱根路を」の作品を、孤独な詩精神の発露ではなく、征夷大將軍としての気概を表現したもの、とする新見解を提示した。あるいは、実朝の父頼朝と慈円との贈答歌が、政治的な意味を持っていたことなどを示した。とくに文学的には否定されることの多かった古今伝授について、相伝・伝受という演技的行為の中で継承される文学的意義を、研究者以外の一般的な読者が想定される場で明らかにした社会的意味は小さくない。ついで「天皇と和歌」(2011)の論考を発表した。これは、9世紀から16世紀までの和歌史を、天皇を中心に記述したものである。儀礼的な場における演技という視点を導入することによって、たんなる事実の羅列ではなく、それぞれの時代において行為として継承されていったさまを明らかにしている点に特色がある。とくに本研究課題との関連で言えば、東西交流の要の位置にある宗尊親王について、その表現の独自性が、為家・真観ら京の歌人の影響のもとに成立しつつも、東国のリアリズムを求める精神に育まれることによって独自の成長と展開を見せ、しかも再び京極派歌人ら京の歌人たちに還流してゆくさまをあきらかにしたり、足利尊氏・義詮・義満ら室町將軍らが、天皇の権威を借りつつ和歌によって自己の地位を荘厳していったりした様相を示した。また、『和歌の心と情景』(2010)では、『万葉集』の風景と抒情(第一章)、「王朝和歌と「歌合」」(第四章)、「西行の旅と和歌」(第六章)、「將軍源実朝の和歌」(第八章)、「古今伝授の意義」(第十一章)の5章を執筆した。なかでも本研究課題ととりわけ関わるのは第八章で、源

実朝の音と古歌へのこだわりを様々な観点から分析することを通して、それらは征夷大將軍としての彼の政治的あり方と関連付けられる、と指摘している。

2)「藤原定家の方法」(2011)は、結果的に表現されたものだけではなく、表現されなかったものを考えることで、藤原定家の独自の和歌の表現方法を把握している点が独創的である。例えば、難解で知られる定家の代表作の一つ「春の夜の夢の浮橋」の歌において、「花」が発想の起点にあり、そこから想像力を展開したあげく、「花」そのものは表現の上から削除されていると考え、こうした方法が他の定家の歌にも見られることを指摘している。「歌合の〈声〉——読み上げ、詠じもしたる」(2011)は、藤原俊成の歌論的主著『古来風躰抄』における、従来ももっとも注目されてきた発言について、新しい視点から意義づけた論文である。俊成が強調した「声」は、和歌を現在性と歴史性をつなぐ伝承的行為と見なすことであり、それを「姿」という文体の問題を通して語ろうとしたところに彼の独自性がある、と結論付けている。

3)「記憶としての鳥羽殿——和歌の視点から——」(2010)は、院政期に建設された善美を尽くした都市空間である鳥羽離宮が、風雅の美と死との両面の記憶を背負った存在であることを指摘し、その記憶が『西行物語』に表れる西行像や『平家物語』大原御幸などに生かされていることを明らかにした。

4)『新古今和歌集』の注釈の共同作業については、平成26年度に和歌文学大系シリーズの一冊として出版が予定されている。とくに神祇・釈教などの歌について解釈学的な新知見が蓄積されつつある。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

渡部 泰明 (東京大学・大学院人文社会系
研究科・教授)

[雑誌論文] (計 2 件)

研究者番号 : 60191813

1. 渡部泰明 「記憶としての鳥羽殿——和歌の視点から——」『説話文学研究』第 45 号 (2010 年 7 月)、説話文学会、50~58 頁、査読あり。
2. 渡部泰明 「藤原定家の方法」『文学 隔月刊』第 12 巻第 1 号 (2011 年 1 月)、岩波書店、42~56 頁、査読なし。

(2) 研究分担者
()

研究者番号 :

(3) 連携研究者
()

研究者番号 :

[学会発表] (計 1 件)

1. 渡部泰明 「記憶としての鳥羽殿——和歌の視点から——」説話文学会、2009 年 4 月 25 日、京都府立大学。

[図書] (計 4 件)

1. 渡部泰明 『和歌とは何か』(岩波書店、2009 年 7 月、245 頁)。
2. 渡部泰明・島内裕子・島内景二・杉浦克巳 『和歌の心と情景』(放送大学教育振興会、2010 年 3 月、11-23、52-64、79-92、106-119、147-160 頁)。
3. 阿部泰郎・錦仁・渡部泰明・前田雅之ほか 『聖なる声——和歌にひそむ力』(三弥井書店、2011 年 5 月、132-155 頁)。
4. 渡部泰明・鈴木健一・阿部泰郎・松澤克行 『天皇の歴史 10 天皇と芸能』(講談社、2011 年 11 月、13-97 頁)。

[産業財産権]

○出願状況 (計 0 件)

[その他]

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者